



高橋秀夫

朝、洗面台を覗き込んだ男はいつもと違う自分の顔に違和感を感じた。

「あれ？俺こんな顔だったかなあ？」

はっきり何がおかしい、とは言い切れない。しかし、確実に何かが変わってきていた。

たとえば目だ。自分の目はもっとぱっちりしていたような気がするが、今は厚ぼったい瞼に寝ぼけた瞳がのぞいている。

寝起きだからだろうと、いつものように顔を洗いひげそりに手を伸ばした。鏡を見つめながら自分のほほから顎にかけてを手でなぞる。そう言えば二十歳のころはほとんどひげなんか無かったのにここ最近、急に濃くなった気がする。これも気のせいだろうか？

ひげをそりながら考えるが、答えなど出るはずもない。

朝は忙しいのだ。急いで着替えて出かけなくては会社に遅刻してしまう。スーツのズボンを履きベルトを締める。最近太ってしまったようだ。今日もまたベルトの穴が一つずれていた。

あくる日の朝、鏡をのぞいた男は、自分の体の変化がまた進んでいることに驚いた。

鏡に映るこの顔には何となく見覚えがあった。

そうだ間違いのない確か、名前は…そう、『高橋 秀夫』だ。細い目にもみあげにまで続く青い髭の後。次第に後退していく生え際。メタボりっくなおなか。どれもが男の知る『高橋 秀夫』の特徴を示していた。

そんなバカな。なんで俺が……

男は鏡を見つめ愕然とした。そこには二十歳のころのさわやかだった青年の面影はすでになかった。

それから毎日、男の姿は少しずつ『高橋 秀夫』に近づいて行った。毎日見ていればその変化は小さいが、久々に会った人では男が本人であることに気がつかないかもしれない。それほど劇的な変化だった。

日に日に姿を変えていく自分の容姿に男は恐怖を感じた。自分があんなに嫌がっていた、よりもよって『高橋 秀樹』になってしまうなんて、考えるだけでもぞっとする。男は毎日鏡の前に立つのが苦痛になっていた。

そんなある日、男のもとに一本の電話が入った。それは実家で行われる法事の案内だった。久々に会う親戚に変わってしまった自分の顔を見られるのは嫌だったが、このままいつまでも隠れて生きていくことはできない。男は覚悟をきめて親戚の集まる実家に帰った。

重い足を引きずり実家の門をくぐった。そこには子供のころから見慣れた叔父や叔母の顔がある。親戚たちは男の顔を見て言った。

「おお、やっと来たか秀夫。待ちくたびれたぞ」

案の定、親戚の叔父は男と『高橋 秀夫』を間違えた。まあ仕方のないことだ自分でも見分けがつかないほどに変化は進んでいる。

溜息をつきながら男はやんわりと否定する。

「叔父さん、違いますよ。よく見てください」

「おお、スマンスマン。そうか。秀樹君のほうか、やっぱり親子だねえ、お父さんそっくりになったな」

「その言葉だけは聞きたくなかったんです……」

END